

# 助数詞選択と数量詞のレトリック

こまつばら 哲太

京都大学大学院／日本学術振興会

komatsubara@hi.h.kyoto-u.ac.jp

キーワード：数詞、助数詞の選択、比喻、転移修飾、修辭的効果

## 1. はじめに

本論文では、レトリックの観点から、数量の意味を表す日本語の連体修飾表現をとりあげる。数を直接表す語句は、**数詞** (numeral) とよばれる。数詞は一般に、ある存在の数量や順序を修飾、あるいは叙述する機能を担っている。数詞が修飾部として修飾の構文に用いられるときには、数詞の表す数は、ふつう被修飾部の数量や順序である。例えば「三つ目の問題を解く」といえば、「三」は「問題」の順序を表すし、「魚が三匹釣れた」といえば、「三」は「魚」の数量を表す。「ある命題の値が真となる範囲を数量や割合として表す働きをする語（句）」(大塚・中島 1983: 990) は、一般に**数量詞** (quantifier) とよばれ、これまでの文法研究においては、数詞による連体修飾表現は数量詞の一つとして位置づけられてきた<sup>1</sup>。

数詞を用いた数量詞の機能は、基本的に、被修飾部の数量を限定するという点にあるものとみなされてきた(奥津 1969, 1996a, b)。一見すると、数量表現の意味は単純で、情報伝達の上で重要ではあっても、特別印象的な効果があるとは思われない。しかし、数詞を用いた数量詞の用法の中には、単に被修飾部の数量を表すのではなく、修辭性をともなうて、特別の表現効果をもたらす事例がみられる。特徴的な表現効果をもたらす数量詞のレトリックは、従来の研究ではほとんど記述されていない。本論文では、数量詞がコンテキストに応じて創造的な意味を表す表現に関する記述を行う。以下では、まず2節で数量詞のスタンダードな表現方法を概観した後、3節以降で、数量詞のレトリックについて論じていく。3節では、助数詞の選択によって被修飾部が比喩的転義を起こす事例について論じ、4節では、数量詞の転移修飾現象について論じる。5節では、転移修飾の修辭性の問題を詳しく取り上げ、助数詞の抽象度の観点から、修辭性の動機づけを分析していく。6節では、本論文のまとめと展望を述べる。

## 2. 数詞と助数詞の機能分担

数詞は、単独で修飾部となる形容詞 (e.g. 厚い本) とは異なり、それだけでは修飾の機能を持たない (e.g. \*三の本／三冊の本) ことに加え、いくつか特徴的な文法的振る舞いをする事が知られている。スタンダードから逸脱した修辭性の高い表現を分析していくために、まずここでは、数詞を用いたスタンダードな修飾表現の性質を概観しておく。

数え上げに用いる場合や、数の名前として用いる場合等の特別な用例を除けば、数詞はふつう、(1)に例示するような色々な助数詞(classifier)とともに用いられる<sup>2</sup>。ルビを付した「一人」「四台」「七棹」における /hito/, /yo/, /nana/ のような系列は和語数詞、「二回」「三個」「五番線」「六試合」「八匹」「九時間」における /ni/, /san/, /go/, /roku/, /hachi/, /ku/ のような系列は漢語数詞とよばれ、どちらの数詞系列が用いられるかは、多くの場合、助数詞に依存して決定される。

- (1) 一人、二回、三個、四台、五番線、六試合、七棹、八匹、九時間

「数詞+助数詞」という形式は、次のような三つの構文のタイプのいずれかに生起する。

- (2) a. 世界記録を十秒上回った。  
 b. 二籠のブルーベリーを買った。  
 c. 本三冊を買った。

(2a) では、「十秒」は「世界記録を少し上回った」「世界記録を大幅に上回った」の下線部のような連用修飾語と同様の位置に現れている点で、「十秒」は「上回った」にかかる連用修飾語として用いられている。これに対して(2b)の「二籠」は、「百貨店のブルーベリーを買った」「山梨県のブルーベリーを買った」のような場合の名詞と同じ位置にある点で、連体修飾語として用いられている。(2a, b)とは異なり、(2c)は修飾構文ではなく、「本」と「三冊」が並列された同格構文であると考えられる<sup>3</sup>。ここではそれぞれ、(2a)を連用修飾用法、(2b)を連体修飾用法、(2c)を同格用法とよんで区別する。本節では、このうち「数詞+助数詞」の連体修飾用法に注目する。

数量詞の観点からみると、(2b)では、「数詞+助数詞」が、助詞「の」をともなって、被修飾部となる名詞の表すものの数量的側面を限定しているという点で、「数詞+助数詞」は数量詞としての機能を担っているといえる。また、修飾機能の観点からみると、(2b)のような修飾表現は、以下の点から、「美しい山」のような、典型的な修飾関係を表す表現であるといえる。第一に、(2b)は、「美しい山」のような装定(junction)から「山が美しい」のような述定(nexus)への転換が可能である。

- (3) 買ったブルーベリーは二籠だった。

第二に、(2b)の「二籠の」という修飾部は、被修飾部「ブルーベリー」の指示対象の範囲を狭める機能を担っている。言い換えると、「二籠のブルーベリー」は、籠を単位とする数量が二であるブルーベリーのみに適用される点で、数量詞をともなわない「ブルーベリー」よりも適用できる対象の範囲が狭められている。第三に、(2b)は、被修飾部が喚起するドメインの範囲を限定する機能を担っている。コンテキストが無い場合、「ブルーベリー」と

いう語のプロファイルは、形状・色・味覚などに関する知覚的なドメインだけでなく、ジャムやタルト、サプリメントなどのブルーベリーを原料とする加工品に関する知識を含む、多種多様なベースの中に位置づけられる。これに対して、「二籠のブルーベリー」のプロファイルを特徴づける概念のベースは、加工されていない果実に関わるドメインのみに限定される。以上より、(2b)のような数量詞の連体修飾表現は、スタンダードな限定修飾の関係を表す表現であるといえる。

ここで注目すべき点は、数詞と助数詞の機能分担である。数詞は、数の概念を直接示すことによって、被修飾部の数量を限定する機能を担っている。これに対して、助数詞は、被修飾部が所属するカテゴリーに関する情報を示し、被修飾部が喚起するドメインの範囲を限定する機能を担っている。例えば「二粒のブルーベリー」では、ジャムに関するコンテキストは抑制され、「二瓶のブルーベリー」では逆に、このコンテキストが相対的に活性化されることになる。この数詞と助数詞の機能分担は、形容詞による修飾表現 (e.g. 青いブルーベリー) や、他の数量詞による修飾表現 (e.g. 少しのブルーベリー) にはみられない特性である。一般に、「数詞+助数詞」によるスタンダードな修飾表現は、数詞が指示対象の数量に関して、助数詞が指示対象を特徴づけるドメインに関して、それぞれ分担して限定修飾の機能を担うものとして特徴づけることができる。

### 3. 助数詞がもたらす認知的解釈

#### 3.1 助数詞選択の主観性

2節では、数量詞によるスタンダードな修飾表現の性質を概観した。「数詞+助数詞」の連体修飾用法では、数詞は数量を限定する機能を担い、助数詞は被修飾部のドメインを限定する機能を担う。一般に、助数詞は、有生性、形状的特性、機能的特性といった意味特性によって階層的に分類することができ、ある助数詞の使用できるかどうかは、この助数詞の意味特性と、助数詞が用いられる語句の指示対象が持つ典型的な特徴との一致の度合いによる (松本 1991, Matsumoto 1993)。

- (4) a. 一匹の {ねずみ/犬/牛}  
 b. 一頭の {??ねずみ/?犬/牛}

助数詞「匹」は「<有生>で<非人間的>であることを必要条件とする」(松本 1991: 85)。「ねずみ」「犬」「牛」はこの条件をみたすので、(4a)のように助数詞「匹」を用いることができる。これに対して「頭」は、大きい動物に限って用いられる助数詞であり「<人間の標準的大きさより大きい>ことを必要条件とする」(ibid.)。したがって、(4b)のように、明らかに小さい「ねずみ」には「頭」が用いられず、大型犬を除いて「犬」にも「頭」はあまり用いられない。スタンダードな数量表現においては、助数詞は、数量詞の被修飾部の指示対象が典型的に備えている特徴に合ったものが選択されるといえる。

しかし実際の言語事例を観察していくと、助数詞は、被修飾部の指示対象が典型的に備

えている客観的な性質に適合するものが選択されるだけでなく、被修飾部の指示対象に対する話者の主観的判断を表すために、より拡張的に用いられる場合もある(井上 1999, 濱野 2006)。

- (5) a. 最初のつがい飼育から六〇ミリメートルを越す F1 の羽化に成功し……今まで十七年間で五〇〇〇頭を越えるオオクワガタを羽化させてきました。

(井上 1999: 32)

- b. 「その通りで御座いますよ。三毛のような可愛らしい猫は鐘と太鼓で探してあるいたって、二人とはおりませんからね」二匹という代りに<sup>かわ</sup>二たりと<sup>ふ</sup>いった。下女の考えでは猫と人間とは同種族のものと思っているらしい。

(夏目漱石『吾輩は猫である』: 82)

生き物には助数詞「匹」がよく用いられるが、(5a) では、助数詞「頭」が用いられることによって「いかにそれが大きなものであるか、野性でなく家畜化したものであるか、という点を(…)アピールする」(井上 1999: 32) 効果が生じる。(5b) では、より誇張的に、人間に用いられる助数詞である「人」が「猫」に用いられることで、三毛という猫は人間として取り扱われるものであるという、「下女」の主観的な態度が示唆される。言い換えるならば、助数詞「人」によって限定的に選択される人間のドメインが、「猫」という語から平常喚起されるドメインの集合の分布を一時的に変更し、変容させることによって、叙述対象に対する話し手の主観的な心情を表明する修辭的効果が生じている。これらの事例から、助数詞は、被修飾部が表す存在の特徴に一致するように受動的に選択される場合だけでなく、被修飾部が表す存在の特徴づけに関わるドメインを限定的に選択する認知的解釈をもたらすために能動的に選択される場合もあることが分かる。

### 3.2 助数詞の認知的解釈と比喩的転義

助数詞選択の修辭性 (i.e. スタンダードな表現方法からの逸脱性) がより明確になるのは、具体的な特定の助数詞と結合しない、抽象概念を表す語句が被修飾部となる場合である。

- (6) a. 勿論、国として、ロシアが受けるべき批評は沢山あるだろう。けれども、何の為に、幾千万の人間が、まるで世界から見すてられ、一滴の愛もない飢餓の裡に犬死にをしなければならないのか。

(宮本百合子「アワビット」: 472)

- b. (…) それらのさまざまな心理的風景は、数個のダンゴが一本の串に刺されているように、一本の感情によって貫かれて居ります。(丁度詩においてあらゆる行が一本の感情によって貫かれていなければならぬように。)

(堀辰雄「室生さんへの手紙」: 219)

(6)の例では、「愛」や「感情」といった抽象名詞の修飾部として、具体的な形状や物性に関する性質を示す「一滴」「一本」という数量詞が用いられている。例えば(6a)では、「一滴」という液体のドメインを喚起する助数詞によって、「愛」を何らかの液体として捉える隠喩 (metaphor) の効果が生じる。(6b)では、具体的に「ダンゴ」を貫通する「一本の串」が直喩として明示されており、「一本の感情」には「一本の串」のイメージが比喩的に重ね合わせられる。

また、被修飾部の指示対象が典型的に所属すると考えられるカテゴリーの特徴とは明らかに矛盾する意味特性を持つ助数詞が選択される場合にも、数量詞による修飾関係が修辭の焦点として際立ちを帯びる。

- (7) a. 一枚の紙へはノミノスクネやイノシシが刷られ  
一枚の紙は彼女が売娼窟で  
貞操を売った後を\*うのだ——、  
一枚のイノシシは優に十人の  
娘の貞操を買うことができる

(小熊秀雄「紙幣」:152; 「\*」は原文のまま)

- b. 唯、威儀を正しささえすれば、一頁の漫画が<sup>たちま</sup>忽ちに、一幅の<sup>いっぶく</sup>山水<sup>さんすい</sup>となるのは当然である。

(芥川龍之介「近藤浩一路氏の事」:225)

(7a)では、「イノシシ」には普通「頭」や「匹」が用いられるという点で、非生物にのみ用いられる「一枚の」という数量修飾の表現は逸脱的である。ここでは「イノシシ」が文字通り獣を表すのではなく、「イノシシ」が刷られた紙幣を指示すること、すなわち換喩 (metonymy) であることを、助数詞が明示しているといえる。(7b)における「一幅」という典型的に絵画に用いられる助数詞が、文字通りには自然の景色を意味する「山水」に用いられることによって、山水それ自体から、山水が描かれた絵画への焦点シフトのプロセスが喚起されることで、「山水」には換喩的な転義が生じることになる。

以上のような修辭性の高い事例では、数量詞はスタンダードな数量修飾の関係だけを表すのではなく、特定の助数詞の選択が特定のドメイン選択の解釈を与えることで、被修飾部の転義が促される。これによって、被修飾部が表す存在は、平常とは異なるドメインに位置づけられ、数量詞は、そのドメインの中で数量を限定する機能を担っているといえる。

#### 4. 数量詞の転移修飾

##### 4.1 転移修飾の修辭性

3節では、助数詞の選択に関わる修辭性 (i.e. 逸脱性) によって、被修飾部に転義がもたらされる事例をみた。この種の事例では、被修飾部は平常とは異なるドメインに位置づけられることになるが、数量詞が被修飾部の数量を限定しているという点では、スタンダード

な数量表現と同じである。これに対して、次の例では、修飾部が被修飾部にかかっているだけでなく、他の部分の数量を限定する機能を担っている。

- (8) a. このチケットがたった一枚の希望だ。  
 b. ああ御飯のおいしさありがたさ、一粒一粒の光明をひしひし<sup>あじわ</sup>味った(…)。  
 (種田山頭火「一草庵日記」:87)

(8)の数量詞「一粒」「一枚」は、統語的には後続の被修飾名詞を修飾するようにみえる。しかし、第一に、述定への転換が不可能である点から、被修飾名詞の数量を限定するスタンダードな表現であるとはいえないことが分かる。

- (9) a. ? 光明は一粒だ。  
 b. ? 希望はたった一枚だ。

第二に、(8)のような表現は、数量詞を文の主語を修飾する位置に移動させた(10a)や(11a)のような表現が表す叙述内容をパラフレーズする関係にある。第三に、この移動させた表現においては、(10b)や(11b)のように、装定を述定へ転換することが可能である。

- (10) a. 一粒一粒の御飯のおいしさをひしひし味った。  
 b. 御飯は一粒だ。  
 (11) a. このたった一枚のチケットが希望だ。  
 b. チケットはたった一枚だ。

以上より(8)では、統語的には、数量詞が後続の被修飾名詞にかかっているが、意味的には、文の主語とスタンダードな修飾関係にあるといえる。以上の三つの特徴はすべて、(12)のような典型的な**転移修飾 (transferred epithet)**の表現が備えているものである。

- (12) a. 男は、つかれた夜道をとぼとぼと帰っていった。(山梨 1995: 179)  
 b. ??夜道はつかれていた。  
 c. つかれた男は、夜道をとぼとぼと帰っていった。  
 d. 男はつかれていた。

第一に、(12a)に対応する述定(12b)は不適切である。第二に、(12a)は、(12c)のような表現の叙述内容をパラフレーズする関係にある。第三に、(12c)については(12d)のような述定への転換が可能である。したがって、(12a)のような転移修飾の典型例では、修飾部「つかれた」は、文字通りの被修飾部「夜道」ではなく、主語「男」と、よりスタンダードな修飾関係を結んでいるといえる。したがって、(8)は、転移修飾の事例であるといえる。

Hall (1973), 山梨 (1991, 1995: 79-80), 篠原 (2002: 279-282), 金澤 (2008), 木原 (2009), 神澤 (2011) など、これまでの転移修飾の研究では、「嬉しい」「さびしい」といった感情、「疲れた」「寒い」といった感覚を表す修飾表現のみについて論じられてきた。しかし、以上の観察から、転移修飾の現象は、数量の修飾表現についても存在することが分かる<sup>4</sup>。

#### 4.2 転移修飾と連想のプロセス

以下で、数量詞の転移修飾のメカニズムをより詳細に分析していこう。(8)のような数量詞の転移修飾表現は、スタンダードな修飾関係から逸脱しているという点で、修辭性が高い。この種の事例の顕著な特徴は、文字通りの統語上の被修飾部から、意味の上で実質的にかかっている部分がスムーズに理解される点にある。統語上の修飾関係から意味上の修飾関係が容易に理解されるためには、両者の間に何らかの関係がなければならない。

この動機づけとしては、まず、ある種の等価性の関係が考えられる。例えば、(8a)では、統語上の被修飾部である「希望」と、意味上の修飾関係をとる「チケット」の関係は、「希望はこのチケットだけである」のようにコピュラ文による等式叙述によって表すことができる。したがって、ここでは「希望」と「チケット」の概念的な等価性が転移修飾の動機づけとなっていると考えられる。(8b)でも、「光明」と「御飯」は等価関係によって結ばれている。ただし、両者の等価性が現実的というよりは誇張的とみなされる場合には、この関係は隠喩の関係であるといえる。この場合には、厳密には、「光明」と「御飯」は等価関係というよりも、ともにありがたいものであるという類似性に注目した連想関係が問題となる。

(13) a. この論文は、一本の革命である。

b. 祖母は、水に棲む貝で例えれば蜆のような人であった。若し蜆が真珠を抱くものとすれば、それは私に対して持ってくれた一粒の愛だ。

(宮本百合子「祖母のために」: 210-211)

(13a)でも、統語的な被修飾名詞とコンテキスト上の意味的にかかっている名詞、すなわち「革命」と「論文」が表す存在は、これまでの状況を一変させるという類似性にもとづく隠喩的な関係が問題となり、この「革命」と「論文」の関係が、統語的な修飾関係から意味上の転移修飾関係を理解することを可能にしているといえる。(13b)でも同様に、「愛」と「真珠」の間には、類似性にもとづく連想関係が存在する。ここでは、「で例えれば」という比喩の標識が明示されていることによって、「蜆」と「祖母」、「真珠」と「愛」の比喩関係が示されており、この比喩関係に動機づけられて、「一粒の」という修飾語の転移性がスムーズに理解される。

転移修飾の修辭性は、統語上の被修飾部の表す存在と、意味上の修飾関係にある存在との間にある何らかの連想関係によって動機づけられている。ただし、この連想関係は常に一意に定まるわけではない。以下の例では、コンテキストによって、動機づけとなる連想

のタイプはあいまいである。

- (14) a. このお店は私にとって、六坪の夢なんです。  
 b. 涙は二しずくの悲しみとなって彼女の両目からこぼれ出た。

(14a)では、「坪」という助数詞は土地の面積に用いられるという点で、「六坪」という数量詞は、「お店」が換喩的に表す、店の土地にかかっているとみることができる。ここでは、話者の唯一つの「夢」が「このお店」とであるとみると、両者には等価性の関係があるといえる。これに対して、多くの「夢」のうちの一つが「このお店」とであるとみると、両者には集合とその成員の関係があるといえ、修飾の転移性は提喩 (synecdoche) 的な動機づけを反映しているとみなすこともできる。(14b)では、同様に、「悲しみ」という抽象名詞は「しずく」という助数詞の意味特性と整合しないため、「二しずく」という数量詞は、意味上では「涙」にかかっているものとみることができる。ここでは、「涙」は「悲しみ」の象徴 (symbol) であるとみることでもできる一方で、「悲しみ」によって「涙」が「こぼれ出た」という因果関係を読み込む場合には、両者は指標 (index) の関係によって動機づけられているとみることでもできる。

数量詞の転移修飾では、統語的な被修飾部が抽象概念を表すような事例が多く観察される。特に、(14b)の被修飾部にみられるように、形容詞派生名詞は、「個」や「つ」といった広い範囲のカテゴリーに適用することができる助数詞を用いた場合でも、不可能ではないものの、自然な修飾表現を作りづらい (e.g. ?一つの悲しさ、?三個の悲しみ) という点で、修飾の転移性を喚起しやすいと考えられる。次の例でも、統語上の被修飾名詞が示す抽象性が助数詞の意味特性と折り合わない点で、転移修飾の修辞性が生じている。

- (15) a. 仕事帰りのビールが一杯の楽しみだ。  
 b. (…) わずかに一滴の湿りを点じたものがあるとすれば、それはこの <sup>ながむし</sup>蛇の切れ口から出た、なまぐさい腐れ水ばかりであろう。

(芥川龍之介「偷盗」: 123)

(15a)では、「楽しみ」という形容詞派生名詞が表す存在の抽象性が問題となる。ここでは、「ビール」を「楽しみ」の典型例として解釈することで、この修飾関係の修辞性は、提喩の関係に関わる動機づけの反映とみることができる。(15b)の統語上の被修飾部である「湿り」は、動詞「湿る」から派生された名詞である。「湿り」は文字通りには、湿った部分あるいは湿り気の間を意味する (e.g. 地面には夜露の湿りが残っている、部屋の空気に強い湿りを感じる) 点で、「水」などの液体に用いられる助数詞である「滴」を用いることには、修辞性が認められる。ここでは、後続のコンテキストにある「腐れ水」が一滴落ちて「湿りを点じた」という事態の因果関係が、修飾の転移性の動機づけとなっている。以上に示した数量修飾の表現は、修飾関係の転移によって、特有の修辞性を帯びている。



これらの事例の修辞性は、第一に、被修飾部の語句が表す存在の典型的特徴と、選択される助数詞の意味特性が整合しないことに起因する。第二に、数量詞が転移修飾表現となるためには、選択された助数詞の意味特性に適合する他の存在が文中あるいはコンテキストに含まれている必要がある。第三に、このような修辞の構造が、転移修飾としての表現効果を持つためには、統語的な被修飾部が表す存在と、選択された助数詞の意味特性に適合する存在との間に何らかの連想関係が動機づけとして存在している必要がある。この連想関係が基盤となり、統語上の修飾関係と意味上の修飾関係の間にずれが認知されることによって、転移修飾に固有の表現効果がもたらされると考えられる。

## 5. 助数詞の選択と抽象度

4節では、数量修飾の表現の中にも転移修飾の現象が存在し、多様な動機づけによって、統語上の修飾関係と意味上の修飾関係が緊密に結びつけられていることをみた。転移修飾の事例では、文字通りの統語的な修飾関係と、コンテキストから理解される意味的な修飾関係の間に不一致がみられる。文字通りの統語関係をそのまま解釈することができないのは、修飾部の数量詞に含まれる助数詞の選択が逸脱的であるためである。以下では、この点に注目して、修飾部における助数詞の選択という観点から、数量詞の転移性 (i.e. 転移修飾に関わる修飾の逸脱性) のメカニズムに関するより詳細な分析を行っていく。

次の二例では、助数詞「枚」「つ」のいずれを選択するかによって、両者の修辞性は大きく異なる。

- (16) a. このチケットがたった一枚の希望だ。(=8a)  
 b. このチケットがたった一つの希望だ。

「一枚の X」という連体修飾構文の X には、「一枚の写真」「一枚のチケット」のように、平らな物体を表す名詞がふつう用いられる。例えば、JpWac コーパスには、「一枚の X」の用例は 1,483 例あり、X の頻度上位三語は「写真」(203 例)、「絵」(128 例)、「紙」(108 例)であり、「希望」は 0 例であった (2014 年 9 月現在)。(16a) では、「枚」という助数詞を用いるために必要な形態的特徴を持たない抽象概念を指示する「希望」に対して、慣習に反して「枚」が選択されることから、修辞性が生じている。これに対して、助数詞「つ」は「抽象物を含むほとんどすべての無生物に用いることができ、<無生>という条件のみに規定される」(松本 1991: 86)。「枚」を「つ」に換えた (16b) では、転移修飾に関わる修辞性は失われる。したがって (16a) では、「希望」という抽象概念を表す名詞に対して、相対的に意味特性が豊富で、より少数の対象にのみ適用可能である助数詞を選択することによって、転移修飾に関わる修辞性が生じているといえる。

一般に、より抽象度の低い助数詞は、より狭い範囲の対象のみに適用可能であり、その範囲から外れた対象に用いられると、修辞性が生じると考えられる。以下では、この助数詞の抽象度の違いの観点から、助数詞選択に関わる転移修飾の修辞性の差異を論じていく。

本節では、助数詞の抽象度について、次の三つの尺度を区分する。

- (A) 助数詞の形態レベルの抽象度
- (B) 助数詞の句レベルの抽象度
- (C) 助数詞の節レベルの抽象度

以下では、この三つのレベルにおいて、助数詞の抽象度の差異が、転移修飾の修辭性の差異に反映されていることを示す。

### 5.1 助数詞の形態レベルの抽象度

助数詞の形態レベルの抽象度は、助数詞が拘束形態素としてのみ用いられるかどうかによって分析することができる。「試合」「レーン」「カップ」といった助数詞は、「試合に負けた」「レーンを掃除する」「カップを並べる」のように単独で名詞としても用いられる。これらの単独で名詞としても用いられる助数詞は、助数詞へ転換された場合 (e.g. 三試合／五レーン／二カップ) には、名詞用法の指示対象となる存在の持つ具体的なイメージが、数量の単位としてそのまま用いられる。例えば、「二カップの小麦粉」は、典型的には計量カップで二回測った量の小麦粉を意味する。これに対して「枚」「個」といった拘束形態素としてのみ用いられる助数詞には、この種の具体的なイメージはなく、より抽象的でスキーマ的な形態が、数量の単位としてイメージされる。この点で、単独で名詞としても用いられる助数詞はより具体的であるといえる。(14b) における「二しずくの悲しみ」などの例では、助数詞「しずく」の形態レベルの具体性が被修飾名詞の抽象性と衝突していることが、転移修飾の修辭性に反映されていると考えられる。

### 5.2 助数詞の句レベルの抽象度

助数詞の句レベルの抽象度は、「Num+CL+の+X」(Num は数詞、CL は助数詞を表す) という構文における X として適用可能なカテゴリーのタイプによって特徴づけられる。助数詞は、被修飾名詞の意味的性質に沿ったものが選択されなければならない。逆にいえば、修飾される名詞が決まれば、選択可能な助数詞の候補は限定される。よって「六羽のすずめ」は可能でも「??六羽の象」という修飾はできず「六頭の象」等とするのがふつうである。しかし「六匹のすずめ」「六匹の象」はともに可能である。したがってこの例からは、「Num+羽+の+X」「Num+頭+の+X」は、「Num+匹+の+X」よりも適用可能なカテゴリーが狭く、より具体的であるといえる。上述した「枚」と「つ」の句レベルの抽象度の違いは、次の容認度の包含関係からも示される。

- (17) a. 一枚の {写真／シャツ／??石／??椅子／?希望}
- b. 一つの {写真／シャツ／石／椅子／希望}

「一つ」が選択可能である名詞群「写真」「シャツ」「石」「椅子」「希望」には、「一枚」を用いることができる名詞「写真」「シャツ」が含まれていることから、前者は後者よりも多くの概念に適用可能である。この点で「つ」は「枚」よりも抽象度の高い助数詞である<sup>5</sup>。「一枚の希望」をはじめ、(13a)の「一本の革命」や(14a)の「六坪の夢」のように、多くの例において句レベルにおける助数詞の具体性が、転移修飾の修辞性に関与している。

### 5.3 助数詞の節レベルの抽象度

以上のような助数詞の形態論的特性や、修飾構文における被修飾名詞の分布の特性によって、助数詞の抽象度は、文脈とは独立に規定できるようにみえる。しかし、Langacker (2010) が示すように、より厳密には、数量のカテゴリーを類別する表現形式の意味は、節レベルのコンテキストによって柔軟に変化する。以下では、助数詞の節レベルの抽象度という尺度について論じる。

- (18) a. 二袋の豆を煮るつもりだ。  
b. 二袋の豆を軒先に吊るしておく。

(18)の二例では、ともに「袋」という、形態レベルにおいて抽象度の低い助数詞が用いられているが、節レベルでの「袋」の具体性は異なる。(18a)では、「煮るつもりだ」という述語に直接関わる存在(i.e. アクティブ・ゾーン<sup>6</sup>)は、目的語の主要部である「豆」の表すものである。これに対して、(18b)では、述語「吊るしておく」のアクティブ・ゾーンは豆を入れている袋にあたる。ここでは「袋」は単に数量のカテゴリーを指定する補助的な意味を持つだけでなく、「袋を吊るしておく」の場合のように、具体的なものを指示する機能を担っている。したがって、(18b)の「袋」は(18a)よりも、節レベルの抽象度が低いといえる<sup>7</sup>。

節レベルの助数詞の抽象度も、転移修飾の修辞性に関与し得る。(14b)の「涙は二しづくの悲しみとなって彼女の両目からこぼれ出た」について、具体的に節レベルのコンテキストと修辞性の関連性を分析しよう。まず、「水たまりは水蒸気となって空气中に分散していった」という例を考えれば分かるように、「AはBとなってVP」(VPは動詞句)という構文では、VPの意味上の主語となるのは普通Bである。(14b)では、「こぼれ出た」という述語は、「涙」を主語とすることはできるが、文字通りには「悲しみ」という抽象名詞を主語としてとることはできない。しかし、「こぼれ出た」という述語のコンテキストは「しづく」をアクティブ・ゾーンとして際立たせるため、「こぼれ出た」の主語は統語上の主要部である「悲しみ」ではなく、修飾部の「しづく」であると解釈することができる。このことは「涙は二しづくの悲しみとなって彼女の両目からこぼれ出た。そのしづくは頬を伝って、足元にぽとりと落ちた」のように、後続文をコンテキストとして付加した場合、「しづく」を照応することができることから分かる。以上のような節レベルのコンテキストによる助数詞の抽象度の低下は、被修飾部の持つ高い抽象性と衝突して修辞性をもたらす

だけでなく、統語上と意味上の修飾関係が両方理解可能であり、両者の緊張関係によって転移修飾の表現効果をもたらすための基盤となっている。

以上に示した助数詞の抽象度に関する三つの尺度は、数量詞の転移性に複合的に関与している。(14b)の「二しづく」などは、(A), (B), (C)の全ての尺度について抽象度が低く、形容詞を接尾辞「み」によって名詞派生した「悲しみ」の持つ抽象度の高さに対して、逸脱性の高い助数詞選択であるといえる。それにも関わらず、(14b)はレトリックとしては十分容認可能である。助数詞選択の逸脱性は、意味的に整合する修飾関係を探索するプロセスを喚起し、ここでは因果関係によって動機づけられた「悲しみ」から「涙」への修飾関係の転移性を生み出すことで、表現効果として解消されていると考えられる。

## 6. 数量表現の修辞性

本論文では、「数詞+助数詞」の連体修飾用法に注目して、数量詞のレトリック、特に数量詞の転移修飾の現象に関する考察を行った。転移修飾の現象は、従来感情や感覚を表す形容詞との関連で論じられてきており、数量詞による転移修飾の現象は言及されてこなかった。この点で、本論文の記述と考察は、転移修飾のメカニズムに関するより一般的な研究を行っていくための重要な手がかりとなるものであると考えられる。

数量詞の転移修飾は、次のような修辞性の特徴を備えている。

### <転移修飾の修辞性>

- a. 数量詞に含まれる助数詞の意味特性と、統語上の被修飾部が表す存在が持つ典型的な特徴と非整合的であり、統語上の修飾関係は、スタンダードな修飾関係にはない。
- b. 数量詞に含まれる助数詞の意味特性は、コンテキストに含まれる他の存在が持つ典型的な特徴と整合的であり、この別の存在との間に、スタンダードな修飾関係が認められる。

この統語上の修辞的な修飾関係と、意味上のスタンダードな修飾関係は、次の動機づけによって相互に関連している。

### <転移修飾の認知的動機づけ>

統語上の被修飾部が表す存在と、意味上の修飾関係にある別の存在との間には、連想関係が存在する。

この連想関係として、等価性あるいは類似性の関係、類と種の関係、因果関係などが観察された。連想関係が動機づけとなって、統語上の修飾関係と意味上の修飾関係の間に相互関連性が構築され、この相互関係を基盤として、転移修飾に固有の表現効果が生じていると考えられる。

本論文でとりあげた言語現象、特に数量詞の転移修飾現象は、文法研究の面でも、レトリック研究の面でも、これまでの理論的一般化に対して示唆を与える。まず、文法研究の面では、数量詞の転移修飾は、これまでの数量詞に関する機能上の一般化に対する否定的証拠として位置づけられる。数量詞は、統語上の様々な問題との関連で論じられてきた。しかし、数詞を含む数量詞が持っている被修飾部の数量を限定するという機能は、文法規則として安定したものとみなされており、この修飾関係の例外についての記述はみられない。本論文で論じた数量詞の転移修飾の事例は、統語関係としては被修飾部にかかっているが、意味の上では他の部分にかかっている点で、数量詞の文法を論じる上で注意されるべき事例であり、今後の文法研究においても十分な注意が払われるべき現象であると考えられる。次に、レトリック研究の面では、数量詞の転移修飾に関する記述と分析は、転移修飾の研究のスコップを広げる役割を担う。これまで論じられてきた感情や感覚に関わる形容詞の転移修飾は基本的に、人間性を喚起する修飾部が、人間性を喚起しない被修飾部にかかっていく時の非整合性が問題となる。これに対して、数量詞の転移修飾は基本的に、具体的な修飾部を、抽象的な被修飾部に用いる際の非整合性が問題となる。したがって、転移修飾という現象は、修飾部と被修飾部の意味的な非整合性にもとづくものとして、一般的に特徴づけられる。数量詞の転移修飾は、転移修飾のメカニズムについてより一般的な知見を与えるための重要な手がかりとなると考えられ、今後より体系的な記述と、詳細な意味論的、構文論的考察を行っていく必要がある。

## 注

1. 英語では、*all, each, every, both, any, many, much, some, a few* などの語句や、*one, two, three* などの数詞、および *a group (of), a herd (of), a number (of)* などのような語句が、数量詞として位置づけられてきた。
2. 例えば「三個」において、「三」を数詞語幹、「個」を数のカテゴリーを表す接尾辞とし、全体が数詞とよばれる場合もある（森重 1958）。本論文では、「三」などの数を直接表す表現を数詞とよび、数のカテゴリーを表す接尾辞を助数詞とよぶ。
3. 奥津 (1969) は、このタイプの構文が同格構造をとっていることに関して、次のように論じている。まず「太郎が買った本三冊」のように連体修飾の被修飾部におくことができる点で、「本三冊」は全体で名詞句をなす。次に、「太郎が買った {本／三冊} は小説だった」のように、「本」と「三冊」はともに連体修飾の被修飾部にすることができ、さらに、同じ文の目的語としての役割を担う点で、「本」と「三冊」は同格構造を持つ。
4. 尾谷 (2000: 92-95) は、数量詞の連用修飾用法にあたる数量詞遊離 (*quantifier floating*) (e.g. 健次は青果店でリンゴを三個買った。) の現象も、転移修飾の一種として位置づけられることを論じている。数量詞遊離の修辞性と認知的動機づけに関しては、同論文を参照。

5. しかし、「枚」が用いられる全ての名詞について、「つ」を代わりに用いることができるかどうかは議論の余地がある。例えば、小さな切れ端であれば「二枚の紙」は「二つの紙」ということもできるが、半紙程度の大きさについては「?二つの紙」よりも「二枚の紙」が好まれるように思われる。この点からは、ある助数詞を特徴づける典型的な性質を備えた存在を指示する語句に対しては特定性の高い助数詞が用いられ、抽象的な助数詞は避けられると考えられる。複数の選択肢が考えられる場合の助数詞の選好性については、松本 (1991: 101-103) も参照。
6. アクティヴ・ゾーン (active zone) とは、動詞や形容詞などによってプロファイルされた関係に関して最も直接的に参与する部分のことをいう (Langacker 1984: 177)。
7. この助数詞の換喩的意味変化は、Langacker (2010) の論じる、英語の類別表現に関する以下の現象と並行的である。

(i) She drank two glasses of water.

(ii) I spread three bags of mulch around the roses. (Langacker 2010: 48)

ここでは、飲んだり広げたりするのは *glasses, bags* でなく、その内容物であることは明らかである。日本語の類別表現は修飾部にくるので、文字通りの目的語となる内容物 (e.g. 豆) が容器を指す点に関して換喩の修辞性が認められるが、英語の類別表現は被修飾部にくるので、容器 (e.g. *glasses*) が中身を表す点に換喩的な転義が認められる。この換喩の焦点シフトの方向については、両言語は対照的であるといえる。

### 引用例出典

- 芥川龍之介. 1995[1917]. 「偷盗」『芥川龍之介全集第二巻』: 123-208. 東京: 岩波書店.
- 芥川龍之介. 1996 [1920]. 「近藤浩一路氏の事」『芥川龍之介全集第六巻』: 225-226. 東京: 岩波書店.
- 小熊秀雄. 1977 [1930]. 「紙幣」『小熊秀雄全集第一巻』: 149-165. 東京: 創樹社.
- 種田山頭火. 1987 [1940]. 「一草庵日記」『山頭火全集第十巻』: 85-149. 東京: 春陽堂書店.
- 夏目漱石. 1938 [1905]. 『吾輩は猫である』東京: 岩波書店.
- 堀辰雄. 1977 [1925]. 「室生さんへの手紙」『堀辰雄全集第三巻』: 217-223. 東京: 筑摩書房.
- 宮本百合子. 1979 [1922]. 「アワビット」『宮本百合子全集第十四巻』: 471-472. 東京: 新日本出版社.
- 宮本百合子. 1981 [1925]. 「祖母のために」『宮本百合子全集第十七巻』: 202-212. 東京: 新日本出版社.

## 参考文献

- Hall, Robert A. 1973. The Transferred Epithet in P. G. Wodehouse. *Linguistic Inquiry* 4(1): 92-94.
- 濱野寛子. 2006. 「助数詞『本』の多義性に関する認知言語学的考察」『言語科学論集』12: 77-93.
- 井上京子. 1999. 「助数詞は何のためにあるのか」『言語』28(10): 30-37.
- 金澤俊吾. 2008. 「転移修飾表現とその修飾関係の多様性について」『英語青年』153(10): 614-616.
- 神澤克徳. 2011. 『日本語の転移修飾への認知的アプローチ』京都大学 人間・環境学研究所 修士論文.
- 木原恵美子. 2009. 「転移修飾表現の修飾構造とその動機付け」『認知言語学論考』9: 177-209.
- Langacker, Ronald W. 1984. Active Zones. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 10: 172-178.
- Langacker, Ronald W. 2010. A Lot of Quantifiers. In Sally Rice and John Newman (eds.), *Empirical and Experimental Methods in Cognitive/Functional Research*, 41-57. Stanford: CSLI Publications.
- 松本曜. 1991. 「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」『言語研究』99: 82-106.
- Matsumoto, Yo. 1993. Japanese Numeral Classifiers. *Linguistics* 31: 667-713.
- 森重敏. 1958. 「数詞とその語尾としての助数詞」『国語国文』27(12): 12-33.
- 尾谷昌則. 2000. 「遊離数量詞に反映される認知ストラテジー」『言語科学論集』6: 61-101.
- 奥津敬一郎. 1969. 「数量的表現の文法」『日本語教育』14: 42-60.
- 奥津敬一郎. 1996a. 「連体即連用—数量詞移動その一—」『日本語学』15(1): 112-119.
- 奥津敬一郎. 1996b. 「連体即連用—数量詞移動その二—」『日本語学』15(2): 95-105.
- 大塚高信・中島文雄(編) 1983. 『新英語学辞典』東京: 研究社.
- 篠原俊吾. 2002. 「『悲しさ』『さびしさ』はどこにあるのか」西村義樹(編)『認知言語学 I—事象構造—』: 261-284. 東京: 東京大学出版.
- 山梨正明. 1991. 「修飾のレトリックと文法—連体修飾の問題を中心に—」『表現研究』54: 43-57.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.

## Rhetoric of Quantifiers and Choices of Classifiers

Tetsuta Komatsubara

The purpose of this paper is to describe figurative uses of quantifiers in Japanese. A great deal of previous research on quantifiers has presupposed that a quantifier works on the modified noun phrase. As counterexamples to the previous description, this paper shows instances where quantifiers operate on phrases other than the noun phrases they modify, just in the same way as the transferred epithet (TE) in rhetoric. A typical example of TE-type quantifiers is like the following: *Kono chiketto ga tatta ichi-mai no kibou da.* 'This ticket is only one hope left.' Here, the quantifier *ichi-mai* comprises the number *ichi* and the classifier *mai*, which is used to count sheet-like objects. In the phrase of *ichimai no kibou*, the quantifier *ichi-mai* syntactically modifies the following noun *kibou*, and may result in semantic anomaly since *kibou* 'hope' itself does not refer to any concrete object. However, the expression in question can be interpretable because the quantifier *ichi-mai* is semantically compatible with another noun phrase, *chiketto* 'ticket'. In order that this discrepancy of quantification can be understood figuratively, there must be some motivation between the syntactically quantified entity and the semantically more appropriate quantified entity. Four types of associative relationships are proposed as cognitive motivations of TE-type quantifiers: (i) equivalence, (ii) similarity, (iii) categorization, and (iv) causation. The description in this paper shows the linguistic fact that there are counterexamples to the syntactic rules for quantification, and requests to accommodate the rules to instances of TE.